

# 大学出版

No.

2005.6

65 夏

大学と社会を結ぶ知のネットワーク

特集

## 情報発信の新たな展開

はたして紙はなくなるのか? \* 天谷 幹夫 — 4

農村発の情報をもっと豊かに

一〇年目を迎えた『ルーラル電子図書館』\* 小林 誠 — 8

オープンアクセス方式学術ジャーナルの動向

——学術コミュニケーションの危機は解決できるか \* 山本 俊明 — 12

\* 変化のなかの大学出版部 \* 山口 雅己 — 1

\* 「第六回モスクワ国際ノン／フィクションブックフェア」

派遣報告（後編）\* 中村 晃司 — 16

● 連載

ペーパークラフトの四季——夏 ペーパークラフトで表現する動物たち \* 畑野 光男 — 表2

歩く・見る・聞く 38 武蔵野美術大学 美術資料図書館 — 20

大学出版部ニュース — 22

関西支部だより — 表3

THE ASSOCIATION OF JAPANESE UNIVERSITY PRESSES

日本大学出版部協会



紙で作る動物には、さまざまな表現方法があります。折り紙のようにハサミや糊を使わず、折り込むだけで細かな部分まで表現するものや、本の付録などでよく見かける、表面を絵で処理したものを糊貼りや差し込みで組み立てるもの、そして、動物の形を多面に置き換えて、それを貼り合わせて立体にしたもの等、たぐさんのペーパークラフトがあり、それぞれがすばらしい表現方法です。

私が作る動物たちは、紙の特性、素材を出来る限り生かし、形だけでなくそれに動きを与え、生き生きとした親しみのあるペーパークラフトであってほしいと考えています。

作品の題材は自然の中で自由に生活する動物が多く、これを選んだ動機の一つに、子供のころサーカスで初めて見たゾウの大きさと臭いにびびくりした印象が強いです。当時はサーカステントの脇にゾウの囲いがあり自由に見ることが出来たのです。ライオンやトラ、そしてゾウのショーを、目を輝かして見ていたのを覚えています。後に、大自然の野生動物が出てくる「ターザン、ハタリ、ディズニーの動物ドキュメンタリー」等の映画を見て野生動物がより好きになりました。

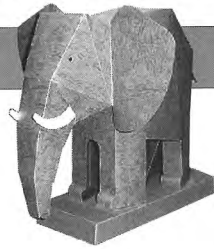
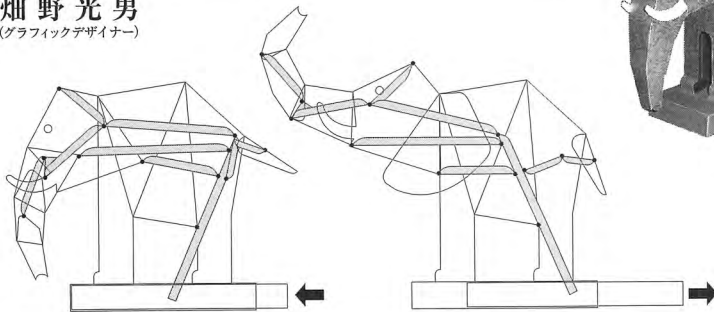
ちよつと話がそれましたが、作品制作の過程を順を追って説明したいと思っています。

まず、動物の観察をします。図鑑等で下調べしたのち、動物園で動物のしぐさ・体型をスケッチします。スケッチは、細かな部分のデテールをつかむのには一番良い方法だと思います。動きについては動物園の動物はほとんど参考になりません。それはドキュメント映画等を見て研究しています。

## ペーパークラフトで表現する動物たち

畑野光男

(グラフィックデザイナー)



夏

ペーパークラフトの  
四季

こうして、いよいよ図面に描き起こす段階に入ります。動物のスケッチを見ながら、俯瞰図を単純な直線に置き換えて、フリーハンドで数点のラフスケッチを描きます。この中から動き方も踏まえ、より単純な線での確にその動物に見えるものを選び、方眼紙に直線で側面図、正面図、上面図を描き移します。ここでむだな線がないかギリギリまで整理し、煮詰めていき仕上げます。

動きの部分は、側面図にコンパスを使って足跡を描き、支点を求めながら動きの変化を描いていきます。私は、作品のポリシーとして3カ所以上は動くように心掛けています。紙の動物たちの動く様子を想像しているこのときが一番楽しい瞬間かも知れません。

平面図が完成した所で、展開図を描き起こします。平面図から実寸を求めるのに、数式は使いません。小数点以下の数値が出てしまえば、定規で計れないのです。そこで三角定規とコンパスで実寸を出します。組み立て順、のりしろを踏まえて展開図を完成させます。

展開図をコピーし、用紙(レザック60)にセロテープで止めます。鉄筆で折り筋を入れカッターナイフで切り離します。それぞれのパーツに折り癖を付け、組み立て順序を考えながら糊貼りで組み立てていきます。

いろいろ困難な過程を経て仕上がった動物たちが図面どおりに動き、草原を駆け、食事をして、水浴びをする野生動物に重なるって見えた時が、このペーパークラフトの完成です。作品ひとつひとつの完成は喜びと感激でいっぱいになり、また次の作品のエネルギーと意欲につながります。

# 変化のなかの大学出版部

山口 雅己

(日本大学出版部協会幹事長・東京大学出版部専務理事)

二〇〇五年四月の定時総会・幹事会を経て、日本大学出版部協会第八代目の幹事長に就任の運びとなった。新米幹事長としてご挨拶申しあげるとともに、協会活動あるいは大学出版部の今後について、考えるところを申し述べたい。

## 協会の現状と法人化の実現

結成以来四二年、本協会の目的あるいは現在にいたる足跡は、多くの人びとにより語り継がれてきた。これについて繰り返すことはしないが、最新の(かつ残念な)報告として、放送大学教育振興会が二〇〇五年三月末をもって退会し、加盟出版部数が二八となったことをお伝えしなくてはならない。一方で、弘前大学出版部を中心に、本協会の兄弟組織的な意味合いをもつ「大学出版連絡会議」を組織しよう、との動きもあるし、個々の大学に出版部をつくりたい、あるいは大学出版部を立ちあげたので、協会に加盟したい、というご相談もいくつか寄せられている。

また、「大学出版」第六四号に掲載された前幹事長・渡邊勲氏の「近未来の実現可能な構想」の追記にある臨時総会での決議に加え、本協会を有限責任中間法人化する構想は冒頭に示した定時総会において最終的に承認され、二〇〇五年七月一日の登記実現を目指し、具体的な作業が進行中である。二八の加盟出版部すべてが、有限責任中間法人の「設立時社員」となることを快諾くださったことに感謝したい。なお、法人化後の新名称は「有限責任中間法人大学出版部協会」となることを付記しておきたい。

## 大学出版部の価値

大学出版活動が今後どう変化していくか、以下で考察するが、別の機会に発表したことと一部重複することを、あらかじめお断りする。

まず、その設立の動機あるいは目的を鑑みれば、大学出版部は(一般的に)利潤を求めものではないと言える。

ただし、これは大学出版部が出版事業によっていくらかでも欠損を出してよい、という意味では決してない。財団法人、学校法人、任意団体等の場合、利潤を出す必要はないにしても、すくなくとも財政的に自立し、おもに書籍の販売収入によって組織を「存続」させることが求められている。では、大学出版部と「商業出版社」との違いは何か。

アメリカカ大学出版部協会 (AAUP) のウェブサイトに「大学出版部の価値」なる一文が掲載されている。同協会のレジェ前会長の諮問に対する、アーマト (現会長、ミネソタUP)、コーン (カンサスUP)、ショット (デュークUP) 三名が連名で寄せた回答と思しきものである。本文はあまり長くはないが、付録として「大学出版部と社会」、「大学出版部と学問」、「大学コミュニティのなかの大学出版部」の三つのパートに二四の提言がまとめられている。

紙幅の関係で詳細は省略するが、「大学出版部と社会」ならびに「大学出版部と学問」に九つずつまとめられた提言は、アメリカにおいてはともかく、日本における大学出版部の役割と、学術書・専門書を出版する「商業出版社」の役割との違いを決定づけるものではない。敢えてひとつ挙げるとすれば、「若手研究者が初めて執筆する学術書の出版を (制度として) 奨励する」ぐらいではないだろうか。

## 大学の変化と大学出版部

大学出版部と「商業出版社」の違いは、つまるところ、

「母体大学との結びつき」に収斂する。そして、わが国の大学をとりまく環境が、ここ数年にわたり激しい変化にさらされていることは言を待たない。

とくに少子化による学生数の減少は、国公私立の区別なく、大学の生存競争に拍車をかけている。一部の大学で導入されているAO入試は、学生数の確保には有効であろうが、入学試験手数料収入に影響を与えかねない。

これらの財務的な問題とは別に、一部の大学では、既存の出版チャネルを介さない情報発信システムの開発が進められている。新聞でも報道されたが、東京大学・京都大学・大阪大学・早稲田大学・慶応義塾大学・東京工業大学が連携して、それぞれの授業科目の講義ノートや教材などを、ネット上で無償で公開するプロジェクト (オープンコースウェア) がこの六月より開始された。こういった大学の変化・新しい動きに対し、大学出版部は何をなすべきであろうか。

アーマトらによる前述の提言の二三番目を以下に紹介し、この一文を終えることにしよう。「大学出版部のスタッフは、知的財産、学術コミュニケーション、および出版のプロセスについての指針を与えることにより、教職員や学校法人の運営者のために、学内の専門家としての役割を果たす。」

## 特集

# 情報発信の 新たな展開

一般家庭における通信ネットワークを用いた情報流通は、十年前にはようやくその緒に就いた段階であった。『情報通信白書』（総務省）によると、情報技術の発展や規制の緩和などの環境整備にともなって、現在日本では携帯電話などの情報端末を含めたインターネット利用者はすでに六〇%を超え、世帯普及率は九〇%に迫ろうとしている。

今号の特集では、急速に普及したインターネットを背景に、書籍出版の展望や現状、出版社の取り組みを論じた。

個人が全世界に向かってあらゆる情報を発信できる今、我々は大学出版部としての存立基盤を確固たるものにしなければならないだろう。

# はたして紙はなくなるのか？

天谷 幹夫 (株式会社パピレス代表取締役)

当社がインターネットでの電子書籍の販売を始めて丁度一〇年になります。社名のパピレスは、将来紙が不要になる、すなわちパピルスがレスになるだろうという意味で付けました。しかし、本当に紙がなくなるかどうかは人によって意見が異なります。

「パソコンで本は読まないでしょう……」さすがに最近、ここまで言い切る人は少なくなりました。でも、五、六年前は、いろんな人によく言われたものでした。時がたつと人の言葉も変わるもの、今、皆さんが言われるのは、「電子書籍は増えていくでしょうが、紙を駆逐するとか、そんなことはありえない。紙と共存するか、あるいは紙を補充するものとなるでしょう……」です。ただまれに、「一〇年後に、出版物のほとんどはデジタル化される」と言われる方もいます。デジタル化はどこまで進むのか、はたして紙はなくなるのか。未来は誰にも分かりませんが、過去を見れば未来が分かると言えます。このため、過去に遡って

出版の歴史を俯瞰すれば、今我々が直面しているデジタル化の時代を見通せるのではないかと思ひ、その歴史を調べました。

出版の歴史を紐解く第一弾として、まず文字がどのように誕生し、発展していったのかをみました。文字は今から約五〇〇〇年前に都市国家を築いたシュメール人により発明されたといわれます。当初は巨大・複雑化する国家を治めていくのに必要な税の徴収、財産管理、情報伝達など実用的な記録を残すために考案されたのです。文字が人間の記憶を補助するだけでなく、時空を超え人々に思想や感情をも伝える文字表現として多用されるのは後代のこと。「必要は発明の母」だったようです。

文字は視覚的な媒体に記録されることで次第に強力なコミュニケーション手段となりえました。ただ誰もが扱えるものではなく、書記と呼ばれる特権階級しか操ることができませんでした。書記は税を免除されるなど一般民衆とは

違った特別待遇を受けていました。そのため立身出世タイプの若者は書記になることを目指し、書記養成学校では現代さながらの受験戦争が繰り広げられていたようです。

情報をより広く客観的かつ抽象的に伝える文字は都市国家に広がり、多様化していきました。シュメール人は粘土板に刻んだ楔形文字を用いましたが、エジプトではパピルスに記した象形文字、中国では亀の甲に刻んだ甲骨文字が出現しました。欧米人には絵と映るらしい漢字は、絵文字の形をとどめた表意文字として現存する古代の遺物だそう  
です。

ただ最も広く使われたのは言葉の持つ音をそのまま表記する表音文字でした。表音文字は記録しやすいだけでなく、異文化の言葉を簡単に取り込むことができたため、様々な人々との交流に都合がよかったからです。それが現在世界中に流布しているアルファベットの誕生につながっていきます。

文字文化の発展の一方で、かつてシャーマンとして国家に君臨していた語り部たちの地位と声による伝承文化は次第に失われていきます。文字は記憶に優れた特殊な人々を必要としなくなりました。さらに安価で便利な媒体——紙の普及によって、文字文化は一般民衆にも広がっていくこととなります。

現在では当たり前になりすぎた記録媒体である紙は、紀元前二〇〇年頃中国で発明されました。当時まだ紙は主流

ではなく、木や竹の札を何枚も紐で繋いで重ねた木簡・竹簡が併用して多く使われており、これらには重くてかさばるといふ難点がありました。

紀元前九一年に完成された五二万六五〇〇字（二三〇巻）にも及ぶ司馬遷の「史記」も木簡に書かれたそうですが、狭いスペースに重ね合わせてこの膨大な量を書き上げるのはさぞ難儀だったと思われます。出来上がった本を持ち運ぶのも一苦労です。おまけに木簡は文字を削ったり、札の入れ替えや挿入が簡単にできたため、改竄や改変が問題視されてきました。

広大な中国を治める王朝にとって、正確に迅速に多くの情報を掌握することは大変重要です。紀元一〇五年、後漢の宮廷に仕えた蔡倫という宦官は、より丈夫で安価な紙の必要性を感じ、休暇を利用してコツコツ研究を重ね、数多くの失敗を繰り返しながらも十数年の歳月を経てようやく紙の改良に成功しました。紙は戸籍や公文書の作成、儒教や仏教など思想の普及、詩歌や物語文学の発展に大きく寄与しました。唐王朝で花開いた律令制による中央集権体制や国際文化の繁栄は紙の恩恵を大いに受けていたと考えられます。

製紙法は国家機密とされたため長年中国文化圏以外には伝えられませんでした。八世紀戦争をきっかけにイスラーム世界にもたらされると、そこから遅れて十二世紀以降ヨーロッパなど世界中に広まりました。紙は、古代エジプ

ト以来四〇〇〇年以上も使われてきたパピルスや羊皮紙より様々な点で優れていましたが、何より重要だったのは最も印刷に適する媒体であったことです。

印刷術も五世紀頃中国で発明されました。また意外にも現存する最古の印刷物は朝鮮や日本にあり、いずれも経文でした。印刷術は聖書よりもまずは仏典の普及に利用されたようです。ただ、薄く多孔質の和紙の特性から大量印刷には不向きでしたし、すでに十一世紀中国で発明されていた膠泥活字についても、数十万種類もある漢字の文字数や材質の問題から一般に普及するには至りませんでした。十五世紀ヨーロッパで紙と印刷術をうまく組み合わせ、一度に大量の本を生産するシステムを作り出し、社会に革命的な影響を与えていったのが、あの有名なグーテンベルクによる活版印刷術でした。

十五世紀グーテンベルクのもたらした活版印刷術は、同じ本の大量生産を可能にし、本の価値を大きく変えていきました。手書きで記されていた写本は、数が少なく高価な貴重品であり、修道院や大学の図書館等に鎖付きで厳重に保管され、一部のインテリ層しか読むことができませんでした。それが広く一般に公開される商品へと変貌していったのです。

また、活字本はそれまでの読書スタイルを根底から変えてしまいました。元来本は聴衆に向けた口述を念頭に書かれており、声に出して読まれるのが通常でした。一語一語

の意味を噛みしめながらゆっくりと音読していく方法で、言霊の魔術師である雄弁家を育てていたのです。書体や字間が画一化された活字本は、速読や黙読という新しい読書方法を可能にし、声を介さず視覚のみで内容を伝えていくクールな媒体に変貌していきました。

活版印刷術の誕生から二〇〇年近くの間に、活字化された題材の大半は古い写本でした。そのため当時の聖職者を中心としたインテリ層の多くは、活字本を「携帯可能で便利な写本」とみなしていましたが、一方で、活字本は「我々から言語力や記憶力を奪い、雄弁術を損なうもの」と考えていました。現代ではほとんど信じ難いことですが、「活字本ばかり読んでいると智恵や教養がなくなってしまう」との不安にかられていたようです。

活字本を積極的に受け入れたのは、むしろ新興の工業者層だったと考えられます。聖書や祈祷書の普及によって手軽に宗教書が読めるようになると教会への不信感も高まり、それが宗教改革者―プロテスタントを出現させていきます。さらに、視覚偏重の均質で固定化された活字空間は、思考の抽象化・客観化・数量化を容易にしていきました。活字に慣れた人々は次第に「神」から離れ、「紙」を信望するようになっていったのです。

十八世紀啓蒙主義の時代に著作権法が整えられ、職業作家が出現してくると、活字本は多様化・個性化していきます。言語の主体が自国語に移り、幅広い読者に支えられた



読書界が形成されると、それはナショナリズムや個人主義を生み、西欧独特の自由・平等な国民国家思想に結びついていったと考えられます。活字本はもはや近代的知識人にとって「完成された知」になりえたのです。

しかし二十世紀以降エレクトロニクスが発展すると、その強固な知の砦を危うくする様々な新しいメディアが出現しました。そしてその波が紙からディスプレイによる表示に繋がるのです。

今の便利な紙が二〇〇〇年前に出現する以前に、パピルスや竹簡の時代が四〇〇〇年近くもあったこと。最初の頃の紙は破れやすくゴワゴワして使い物にならず、竹簡や羊皮紙が三〇〇年以上も併用して使われていたこと。これらの歴史的事実は、デジタル化が進行する現代の状況を客観的に判断するのに大いに役立ちます。現代は、紙とディスプレイが併用して使われる時代です。情報を紙に印刷して本にして持ち歩く時代から、携帯性のあるディスプレイ端末機器にデジタルで保存し持ち歩く時代に、一〇〇年以上かけて移り変わる時期と考えられます。

携帯性のある端末機器として、今はノートパソコンや、PDA、携帯電話をイメージしますが、一〇〇年後の端末は、薄い下敷きの様な物かも知れません。仮にイーペーパーと呼びますが、その中にディスプレイ機能、メモリ機能、通信機能などのすべてが詰まっています。今のディスプレイは、紙の印刷に比べ見にくい、目が疲れるなどの難点が

ありますが、どんどん進化し、紙より高解像度でコントラストの高い鮮明な表示媒体になるでしょう。一枚のイーペーパーでインターネットを閲覧したり、何百冊の本を読んだりする未来が来るのです。

さらに大きな変革は、情報の流通も紙のような物理的な輸送でなく、ネットワークを介して電子的に行われることです。紙で配布していた時よりも短時間で広範囲に情報を伝達できます。全世界で一億八〇〇〇万のWEBサイトが立ち、誰もがそれらを閲覧できるインターネットは、従来の情報の流通形態を根底から覆す可能性があります。グーテンベルクの印刷技術が、民主的国民国家への変遷に大きく影響したように、数百年のスパンで見ると、インターネットの普及は、国民国家の境界さえもあいまいにし、言語や文化、距離の壁をボーダレスにした新しい国家をも生み出す可能性があります。インターネットの持つ情報の共有化、双方向のコミュニケーション特性は、情報を紙に固着した時代から、情報がいろいろな手により加工され変化する「知の流動化」の時代を推し進めるでしょう。

冒頭で提示しました、紙はなくなるのかという議論は、人それぞれの捉える時間のスパンが異なるから起きるのです。私たちが生きている五〇年程度のスパンでは、紙はなくならないでしょう。しかし、数百年のスパンでは、新しい媒体に取って代わられることが十分考えられると思います。

# 農村発の情報をもっと豊かに 一〇年目を迎えた『ルーラル電子図書館』

小林 誠 (社団法人農山漁村文化協会 地域形成センター・電子編集部)

私たち、社団法人農山漁村文化協会(農文協)は、農と食・健康・教育を軸に、自然と人間が調和した社会形成をめざして、総合的な活動を展開する文化団体です。今年で創立六五周年を迎えます。

一九九六年からインターネット上に『ルーラル電子図書館』をオープンし、同じ年にCD-ROMの発行も開始しました。以来、電子出版には積極的に取り組んでいます。当初はCD-ROMを中心にユーザを増やしてきましたが、最近では新規ユーザといえどもっぱらといていいくらい、『ルーラル電子図書館』の会員が増えてきています。

『ルーラル電子図書館』のコンテンツをはじめとする概要は、別表のとおりです。

ごらんとおり、農業関係が中心となっていますが、食生活や環境、教育の分野へも広がりをもった、「自然と人間が調和した社会づくりのための総合的な情報センター」として構築され、拡充が行われています。



トップページ

■収録コンテンツ (2005年4月現在)

『現代農業』 農家向け総合月刊誌。農業技術はもとより、食生活、健康、生活全般の技術、販売・経営、地域づくりのための情報を、農家の実践を中心に提供。1985年以降の全記事を収録。記事数約27,000。

『農業技術大系』 作物、野菜、花卉、果樹、畜産、そして全てに共通の基盤となる土壌施肥という6編63分冊の全てを収録。現場の事象を読み解き基本技術を裏付ける基礎科学・基本技術と農家事例からなる。1,500作物・家畜を網羅。農家事例は約2,600。記事数約12,000。

『病害虫の診断と防除』 的確な診断と確実な防除法、減農薬情報までを完備した農作物の防除に関する総合情報、全27巻を収録。約350品目、3,000種の病害虫、雑草140種。記事数約6,000。

『日本の食生活全集』 全国300地域、5,000人の話者より、大正末期から昭和初期まで、戦争による混乱、戦後の洋風化を経る以前の食生活を聞き取り、47都道府県とアイヌの食事。各県内を風土、生業の違いから、いくつかの食文化圏に分けて構成し、四季折々、朝昼晩の献立と、珍しい晴れ食・行事食を記録。記事数約21,000。

『食品加工総覧』 各地の試験研究機関や食品企業で進む素材開発や新商品開発、安全・安心で経費のかからない加工技術の研究、さまざまな加工販売事例など、食品加工をめぐる動きをとらえた食品づくりの大事典。記事数約1,500。

『ふるさと学習・食農教育』 隔月刊『食農教育』をはじめとして、遊びや観察・実験、調理・加工に関する単行本の記事などを収録。記事数約4,000。

■料金 年間24,000円 (2,000ページまで、超過分については1ページあたり10円)

「農業の情報」とは……

農業は農作物や家畜が相手、つまり自然が相手の仕事です。ということは、いつでもどこでも同じ条件下にあるような生産はあり得ません。同じ農家の田畑でも、場所によって土壌や日当たり、水はけ等々、同じ条件ではありません。

農家にしても、年齢や性別が異なれば体力もさまざま。第一、やりたいことがちがうのですから、同じ気象条件にあっても、どんな手を打つのかはちがってきます。たとえば、作物に病気や害虫による被害の恐れが出たときでも、様々な対応が考えられます。全国一律の普遍的な技術、普遍的な対策というようなものがないのが農業です。農業技術は常に農家の個性とともにあり、したがって様々な情報が必要とされるのです。

『現代農業』をはじめとした電子図書館に収められたコンテンツは、そうした要請に応える、農家の発想で書かれた記事がその多くを占めています。

また、現代の農業は、品種、肥料、農薬、機械など、さまざまな資材活用の上になり立っており、自然を相手にするといっても、それらを的確に使いこなしていかななくては安定的な生産は望めません。さらに最近では「安全・安心」「環境保全型農業」に関しての情報も様々に行き交っており、それらの日々新たに生成される情報に対して常にアンテナを張っていくことも要請されています。現代の農業で



『現代農業』の記事表示例

は他の産業に劣らず、情報に対する姿勢が経営を大きく左右するのです。このデータベースは新しい記事によって日々メンテナンスがされているので、最新の情報が得られます。

一方、最新情報とともに、過去の情報もたいへん貴重であるというのが、農業情報の特徴です。何年に一度という異常気象や災害に関しての記事はもとより、生きものである作物や家畜の本性は、数年で変わるようなものではありません。このごろでは、古い品種の復活や、伝統農法の見直しも盛んにされるようになってきました。そういう意味で、二〇年前からの記事を網羅しているということは、たいへん大きな強みです。

## 電子出版で高まる魅力

膨大な数の記事の中から、目的の記事を即座に読むことができる。検索こそデータベースの活用の最大の醍醐味です。

しかも前述のように、農家の個性と関わる情報ということになると、検索のしかたも辞書のような単純な引き方ではなく、全文検索やいくつかの条件を組み合わせたの複合検索が必須です。

検索のキーワードが的確でないと、最適な記事が得られないこともあります。その点では、熱心な読者ほど、適切なキーワードが浮かんでくるということがあります。

そして、ひとつの検索結果に触発されて、さらに新しいキーワードを思いつくということもよくあります。たとえば、「米ヌカ除草」(米ヌカの除草効果に着眼した技術で、減農薬・無農薬栽培ではとても高い関心を呼んでいる)の記事を読めば、米ヌカそのものの成分なども気になります。そこで「米ヌカ」をキーワードにして検索すると、それを使った堆肥をはじめたくさんの記事がでてきますが、中には、健康にいい米ヌカの食べ方の記事もあって、それが家族の話題になったりもする。このように検索によって、新たな発見が得られます。

とくに生産と生活が切り離せない農家の情報では、常にそういうことが起こります。生産の場面でも、生活の場面でも使えるキーワードが、農業ではどこにでもころがって

いるのです。

農業に関わる情報は、電子化され、データベース化されることによって、その価値が飛躍的に高まるのです。

### 自ら情報を編集し発信するユーザも

先に、農業の情報の多様性に触れましたが、それは、ユーザが情報を自ら編集するということにもつながります。多くのユーザは、閲覧した記事を印刷し、テーマ毎にまとめて、いつでもどこでも読めるようにしています。あるいは同じパソコンで資料を作成し、記事をスクラップしています。つまり、自分に必要な情報を編集して、自分のための「本」を作っているのです。

また、最近では農家が自分の生産物を直売所やインターネットで、直接消費者に販売するというケースが増えてきていますが、そんなときに役立てる人も出てきています。消費者に対しての情報発信がますます重要になってきている現在、データベースを活用しようという機運が少しずつ出てきているようにも思われます。

さらに、この六月からは、自治体や農協などの団体ユーザに対して、電子図書館をベースとした独自の情報発信を進めていただけるような新たなサービスも始まります。

これは、団体独自のURLやロゴとともに、地元に着した情報を発信していただくというもので、テキストや画像を組み合わせたページを、ワープロ感覚で誰にでも簡

単に作成できるツールも合わせてご提供します。作成するページから特定の記事へのリンクを設定したり、検索を実行したりすることで、情報発信のレベルアップを図ることが可能となっています。

というわけで、一見、IT技術とは距離のありそうな現場ですが、私たちは、農業・農村こそ電子出版がもっとも活躍できる場なのではないかと考えています。

最近では「食育」や「定年帰農」という言葉が出てきたように、これまでになく食べものや農業・農村への関心が高まっており、それに伴って会員の幅も少しずつ広がってきています。

今後、農村発の情報が、都市住民にとってもますます大切になっていくものと思われませんが、そうした課題に応えるべく、この電子図書館の充実を図っていく所存です。

最後に本誌との関連で、大学での利用について触れておきます。現在、東京農業大学と帯広畜産大学では、キャンパス内のネットワークに接続されている端末からであれば、認証なしで閲覧ができるようになっていきます。いわゆる学術文献ではなく、実際の現場で読む記事がオンラインで使える貴重なデータベースということから、その他の大学でも、導入を検討しているところが増えていきます。

# オープンアクセス方式学術ジャーナルの動向——学術コミュニケーションの危機は解決できるか

山本 俊明

(日本大学出版部協会副幹事長・聖学院大学出版会出版部長)

「オープンアクセス方式の学術ジャーナルが急増」

メール・マガジン「ホットワイ어드」は四月一五日号で、「急増する『オープンアクセス』方式の学術ジャーナル」をタイトルに、オープンアクセス(無料公開)方式の学術ジャーナルが急速に成長していることを報じている。

オープンアクセス方式の学術ジャーナルを発行する機関としては、日本でも知られている Public Library of Science (二誌) やイギリスの出版社 BioMed Central (一〇〇誌) などがある。スウェーデンのルンド大学図書館が管理する The Directory of Open Access Journals によれば、このサイトに掲載されているオープンアクセス方式の学術ジャーナルは、現在一五二九誌あり(四月一五日現在)、論文単位で検索できる数が三八五誌という。商業出版社のエルゼヴィア社の Science Direct が発行している有料の学術ジャーナルが二〇〇誌以上(世界の学術ジャーナルの二〇%という)、ブラックウェル社の Synergy が

七五〇誌、ワイリー社が三五〇誌発行していることと比較すると、読者に無料で配信される「オープンアクセス」方式のジャーナルは世界の学術ジャーナルの実に一五%ぐらいとなり、確かに点数の上では学術情報流通の一角を占めていることになる。しかも最近のトマソン・サイエンティフィックの調査では、引用回数では、オープンアクセス方式の学術ジャーナルのいくつかは高い引用率を示している<sup>①</sup>。いまや学術コミュニケーションの新しいメディアとして無料の学術ジャーナルが数多く発行され、速報性が重視される分野では、オープンアクセス方式のインパクトファクターも高いのである<sup>②</sup>。

「オープンアクセス」の理念は、読者に無料で学術情報を提供し、また著作権をフリーにするなど、さまざまな障壁を取り払うことによって、研究者だけでなく、教師、学生、また関心を持つ多くの人々に対して学術情報にアクセスしやすくすることである。しかし、学術情報の果たす機

能は、多くの人々への情報の伝達・保管だけではない。これまでの学術コミュニケーション・システムは、学術情報の選別というゲートキーパー機能、編集による価値付与、業績証明による昇任、終身在職権の獲得基準、また著名な雑誌に発表し、大学出版社から出版することにより研究者が威信を得るといふ機能も併せ持っていた。

「オープンアクセス」方式はなぜ登場したのか、伝統的な学術コミュニケーション・システムにどのような影響を与えるのか。

### オープンアクセス方式の登場の背景

情報を多くの人々に無料で提供するという意味でのオープンアクセス方式は、インターネットの登場とともにじまっただけでも過言でない。しかし、オープンアクセス方式を「査読を受けた学術情報を、インターネットを通じて、だれにも無料で、いかなる制限も設けることなく利用できるようにする」こと、と定義したのは二〇〇二年二月に十六人の研究者、出版者、図書館責任者などによって言われた「ブダペスト・オープンアクセス・イニシアティブ」によってであった<sup>3)</sup>。その後、二〇〇三年六月の「ベセダ宣言」、二〇〇三年十月の「ベルリン宣言」などで著作権、学術情報の定義が明確にされ、また科学・技術・医学（STM）分野から人文・社会科学にまで領域が拡大され、世界に拡がることにより「オープンアクセス運動」への参加者は増加していったのである。

このようなオープンアクセス運動が登場した背景には、学術コミュニケーションの危機の問題がある。第一は「シリアルズ・クライシス」といわれる状況である。学術ジャーナルを発行している大手商業出版者がその価格を引き上げ、研究図書館が購入点数を削減せざるを得なくなり、さらに学術ジャーナルの価格があがり、結果的に、研究者が研究成果を自由に主体的に発表できなくなった状況のことである<sup>4)</sup>。特に価格の上昇率の大きかったSTM系の研究者たちは、PubMed Centralなどのサイトに学術情報を載せ、無料で公開することをはじめていた。「シリアルズ・クライシス」は、大学、研究者、図書館に学術コミュニケーションの適切なメディアは何かを考えるきっかけを与え、オープンアクセス方式の導入の機会をもたらしたのである。

第二に、特にアメリカにおいて顕著な問題であるが、伝統的な学術コミュニケーション・システムが機能しなくなったという状況がある。学術情報の生産者である消費者である研究者、学術情報を選別し価値付与する出版者（多くは大学出版社と学協会）、学術情報を保存し公開する図書館の三者がシステムの担い手として、学術情報と資金を循環させることにより、若手の研究者は業績証明を得て終身在職権を獲得することができた。また新たな研究資金を得て、研究し、研究成果を出版するという循環ができていたのである。しかしそのシステムが機能しなくなったことが共通の認識となり、二〇〇〇年前後から、この三者

が共同で「学術コミュニケーションの危機」を主題としたセミナーを開催し、盛んに議論がなされている<sup>56)</sup>。二〇〇三年十二月には、シカゴ大学など十の大学で構成されるコンソーシアム(CIC)が「人文科学と社会科学における学術コミュニケーション」という主題で会議を開いている。その中で、イリノイ大学大学院長のジョン・アンズワースとアメリカ学術協議会(ACLS)会長のポージン・ユは、「いささか大胆な提言——われわれは二〇一〇年に学術コミュニケーション・システムがどのようなものであることを望むか」という主題の講演をしている<sup>57)</sup>。アンズワースは、人文科学と社会科学における学術コミュニケーション・システムが生き延びまた発展するためには、低コストの学術情報の電子化は避けがたく、むしろ無料で、質が高い、査読された学術情報を提供できるオープンアクセス方式を導入するべきである、と提案している。

### オープンアクセス方式をめぐるさまざまな議論

学術コミュニケーション・システムの危機を解決することが期待されるオープンアクセス方式であるが、さまざまな批判もなされ、議論が起きていることも事実である。アメリカ研究図書館協会(ARL)のレベッカ・パーレットは機関誌 *Choices* でアメリカ大学出版部の部長たちに、オープンアクセス方式をどう考えるかをアンケート調査している<sup>58)</sup>。問題は三点にまとめられる。

第一は、オープンアクセス方式で発信される学術情報の

質の問題である。これまでは、大学出版部が個々の研究者の作品である原稿を精査し、編集し、レイアウトなどデザインをし、マーケティングを考えた。回答者のひとりはこのような点を検討しないでウェブに載った原稿は権威をもたない。大学出版部が担当してきた出版物の「品質保証」はだが、どのようにするのか」という。

オープンアクセス方式といっても、寄稿論文すべてが掲載されるのではない。PLOS Biology の場合、採択率は二二%であるというから、厳しい査読は経ている。しかし権威のある論文に編集するためには、原稿のチェック、注の文献、あるいはリンク先のURLが存在するかどうかの確認など、編集者の作業が不可欠である。

これからますますオープンアクセス方式のジャーナルの発行点数が増えたときに、対応できる編集システムができているかどうかが課題である。

第二は、オープンアクセス方式の運営費用の問題である。

これまで紙媒体の学術ジャーナルは、主に読者の購読料と広告掲載料で成り立ってきた。しかし読者に無料で提供するオープンアクセス方式では、現在は、著者の負担金が主な収入源なのである。さらに政府、大学、財団などからの助成や寄付によって運営されている。特に著者は、論文一編について五〇〇ドルから一五〇〇ドル支払う。生物医学など研究資金の潤沢な領域以外では、著者に大きな負担となり、民間の研究機関の研究者が有利であることになる。



著者に偏りが生じて「資金、法などの障壁をとり払い、だれもがアクセスできる」オープンアクセス方式そのものが成り立たなくなるのではないかとという懸念もある。

長期的に見て、オープンアクセス方式の学術ジャーナルの発行を安定させるためには、運営費用をだれが負担するかは大きな問題である。

第三は研究業績評価システムの問題である。STMの分野だけでなく、社会科学、人文科学の分野でも学術情報の電子化は進んでいるが、研究者の採用と終身在職権の授与に関わる研究業績評価はまだ「紙の本」でなされていて、近い将来変化する兆しはないことである。伝統的な学術コミュニケーションにおける評価システムは長い年月を掛けて成立してきた。オープンアクセス方式による学術情報が評価されるとしても評価システムが定着するまでに時間が掛かることは間違いないが、どのようにしたらその速度を速められるのか。さまざまな提言がなされているが、まだ解決の方策は見出されていないのが現状である。

### オープンアクセスは学術コミュニケーションの危機を解 決するか

アメリカ大学出版部協会(AAUP)の常任理事のピーター・ギブラーは*Choice*のアンケートに、「オープンアクセス方式」に対する公式見解として答えている。「AAUPは、多くの人々に学術情報を提供するオープンアクセスの基本方針には賛成する。大学出版部でも、オックスフォ

ード、MIT、カリフォルニアなどの大学出版部では図書館と協同でオープンアクセス方式による学術ジャーナルを発行することになっている。しかし、オープンアクセス方式はまだ実験段階を出ていない。あらゆる学問分野でオープンアクセス方式が可能であるか、学術コミュニケーションの形態がどのようなものになるのか、また、オープンアクセス方式の学術ジャーナルの発行は長期間、財政的に安定しているかどうかなど、検討すべき問題が多い。これらの問題に確信を持って答えをだすためにはまだ時期尚早だ」という。

インターネット上に流れる学術情報の量はますます増加している。しかしそれが伝統的な学術コミュニケーションシステムの危機に答えを与えるか、それともまったく新しい学術コミュニケーション・システムを作り出すかを見定めるにはまだ時間が必要なことは確かである。

- (1) Thomson ISI Finds Open Access Journals Making an Impact. [http://thomson.com/common/view\\_news.release](http://thomson.com/common/view_news.release)
- (2) Mary Waltham, "Open Access—the impact of legislative developments", *Learned Publishing*, Vol.18, No.2, April 2005, pp.101-114.
- (3) <http://www.soros.org/openaccess> などを参照。
- (4) Lila Guterman, "The Promise and Peril of 'Open Access'", *The Chronicle of Higher Education*, January 24, 2004, p.A10.
- (5) Cathy N. Davidson, "The Futures of Scholarly Publishing," *The Journal of Scholarly Publishing*, Vol.35, No.3, April 2004, pp.129-134.他多数。
- (6) <http://www.iath.virginia.edu/~jmu2m/CIOSummit.htm>
- (7) Rebecca Ann Bartlett, "University Press and Academic Libraries: Both Crisis and Pie," *Choice*, Vol.41, No.9, May 2004.

# 「第六回モスクワ国際ノン／フィクションブックフェア」派遣報告（後編）

中村 晃司

（東海大学出版会・協会国際部会員）

零下一五度、極寒のモスクワ・シユレメティヴォ第二国際空港に降り立ってから約一週間が経過した。一二月五日、「モスクワ国際ノン／フィクションブックフェア」は、五日間の会期の最終日を迎えた。国際交流基金＋出版文化国際交流会の日本ナショナルブースは、連日二〇〇人を超す来場者で大盛況。日本文化に精通し、日本語を巧みに操る現地アテンド者衆は、そつがなく来場者に対応している。ブースは彼らに任せて、ロシアの大学出版事情の一端に触れてみようとする。サンクトペテルブルグ大学、モスクワ人文大学、モスクワ大学文学部、マリア・キュリー大学（ポーランド）の四出版部のブースに向かった。以下に、モスクワ大学に次ぐ規模の大学出版部とされるサンクトペテルブルク大学、同三〜五番目のモスクワ人文大学での取材記録を紹介しよう。

## サンクトペテルブルク大学出版部

出版部の創立は一九三九年。組織は大学の一部局、大学職員で構成されている。総発行点数一〇〇万以上。年間一千点を刊行し、一点あたりの発行部数は五〇〇〜一五〇〇部。うち大学本部からパンフレット等年間三〇〇点（部数は一五〇〜三〇〇程度）の発行を任される。この資金として、大学から三〇〇万ルーブル（約一二〇〇万円）が付与される。企画は出版部で決定できるが、年一回大学本部に出版計画の承認を得ている。企画は七割が著者からの持ち込み、うち九割が同大学の教員。出版分野の基盤は「歴史書」。年間の重版点数は五〜七点。書籍は電子メールでの注文が可能でモスクワ市内とウクライナに支店（営業所）がある。



モスクワ人文大学出版部の新刊



サンクトペテルブルク大学出版部の新刊

## モスクワ人文大学出版部

一〇年前に設立された大学の一部局である出版部。五〇人の職員で販売担当三人、編集者一人ほど。総発行点数は四〇〇点。うち図書目録に掲載する実動点数は二〇〇点ほど。平均発行部数は五〇〇〜三〇〇〇部と幅広く、市価は平均二〇〇ルーブル（約八〇〇円）程度。著者の九割以上が同大学。印税は一切支払わない。企画は著者からの持ち込みが殆どだが、自費出版以外は学内の企画決定機関が採択する（何と目録には、次年度の刊行計画が載っている）。モスクワ市内に専用販売所を持つが、営業活動は販売会社に委託。新刊の委託期間は三ヶ月、出荷数の大体二五％が返品、七五％は書店で売れる。販売会社への卸値を一〇〇％とすると、八〇％が直接原価、一五％は管理経費等。本当の利益は数％しかない。大学からの運営資金で赤字は出ないが利益は殆どない。出版部で直接販売する金額（大体、販売会社への卸値）と市価にはおよそ四〇％の差があるようだ。

## モスクワ大学出版部訪問

フェアが無事終了し、展示を終えた寄贈図書を在ロシア大使館員に託した翌日、モスクワ大学出版部を訪ねた。詩人プーシキンをして「自身が大学」と称された科学者ロモノソフの建言により一七七五年に創設されたこの大学は、二九学部・約四万人の学生を誇るロシアの最高学府である。筆者の所属する東海大学とモスクワ大学の間には、旧ソ連時代から三十年以上にわたる学術交流協定がある。そこのおかげか、出版部への訪問の約束は、電子メールで簡単に取り付けることができた。出版部は、市内中心のクレムリンに程近い、築一五〇年以上という歴史と風格のあるモスクワ大学の旧館の一角にある。ニコライ・ティモフェエフ部長とエレナ・マニイロワ副編集長が快く応対してくれた。

## 創立は一七五六年

二五〇年前の大学創立から一年後、大学の一部局として出版活動を開始した出



入口の表札



モスクワ大学メインキャンパスの管理棟  
(スターリン建築)

版部は当時、印刷機能も有しており、マスメディア関連・教材・教科書・古典文学などを出版していた。この二〇〇〇年間で約八四〇〇〇点、二億八千万部製作し、二〇〇三年にはロシア印刷文化省から「ロシア出版のリーダー賞」を授与されたロシア出版業界の中心的存在である。所属職員は九〇名、全員が大学職員。うち雑誌担当も含めた編集者が三〇人、校正者が六人、デザイナー三人、タイピング（入力者）六名、販売・経理数名、掃除警備員らで構成される。現在の年間刊行点数は約三〇〇〇点。うち一〇〇〇点が教科書、二〇〇点が一般読者向け、学術雑誌・学内雑誌が二〇点、残りが学術専門書を刊行している。

### 独立採算で運営

他の出版部との違いについて、ティモフェエフ部長は「企画決定とファイナンスの機能が大学から完全独立している唯一の存在」という点を強調した。大学予算で製作するパンフレット類・教材等も手掛けるが、一出版社として業を成し、利益を出しているという強い「誇り」を感じ受けた。編集会議は週一回、毎回進行中の四〜六本の編集方針が確認される。全企画のうち半分は学部主導で決定されたものである。著者の約八割は自大学の教員。残り二割が外部だが、教員・研究者には限らない。採算分岐は、発行部数の約六割前後の売上に設定している。年間売上高は二〇〇〇万ルーブル（約八〇〇〇万円）。現在、倉庫に四〜五〇〇〇点が入庫としてあるが、殆どが完売するので過剰在庫や断裁など倉庫関連の問題は皆無だという。印税の扱いについて尋ねると、対販売会社・書店の総売上高（卸値）の約五〜八％を支払っているそうだ。出版助成金については、昨年度は七点政府等から対著者、対出版者の二種類あり、特に有力な助成金は「ロシア人文科学基金」。助成金を受けたものは、日本では市場性の観点から部数を最低限に抑える傾向があるが、ロシアはその逆で、税金が使われたものは、より多くの人に読んでもらうために部数を多くして、定価を下げて販売する傾向にあるという。



編集室



ティモフェエフ部長（右）とエマニュロワ副編集長（左）

## 環境の変化へ強い意志

旧ソ連政権下の出版社登録制が廃止され、自由に出版業を興すことが出来るようになって以来、競争はますます激しくなってきたであろう。日本の出版不況特に学術専門書出版の現状が芳しくない状況と伝えると「大学出版部らしい良書を作り続けていくしかないし、それが売れないことはない」と、確固たる自信を漲らせたティモフェフ部長は、会談の最後にこう結んだ。「ロシアと日本、言葉や環境は異なるが、教育・研究の社会への還元という目的では同じであるから、お互いの存在を意識しつつ、環境の変化に負けずに頑張ろう」。異国の地に逢う大学出版人の気概に富んだ言葉は、筆者の胸を熱くしてくれた。

## まとめ——ロシアの大学出版部

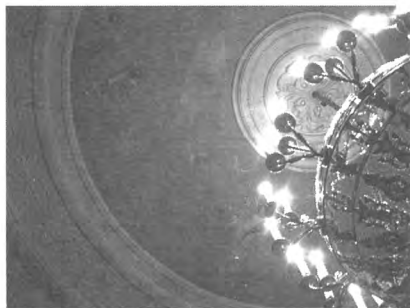
統計によると、ロシアの高等教育機関は約九四〇校（うち五四〇校が国立大学、四一〇万人就学）ある。今回の取材、現地アテンダントらの情報を総合すると、各大学は大小の規模の差はあれども印刷所・出版所のような部門を持っているようだ。うち積極的な出版活動を行っているとして一般に認知されているのが、モスクワ大学、サンクトペテルブルグ大学、極東総合大学、モスクワ人文大学、カザン大学、モスクワ国際関係大学、モスクワ教育大学の七出版部という。また、残念ながら、大学出版部を束ねる当協会のような横断的組織はまだ存在していないので、「大学出版部」と呼ぶことの出来る数の把握は事実上困難であろう。

## 最後に

国際交流活動は、早晩あらゆる利益に繋がるものではない。自らの位置を再確認し、他国の仲間達の存在を意識した出版活動へと展開すること。これが国際交流の一義であることを改めて感じた次第である。今回、大変貴重な機会を与えてくださった、出版文化国際交流会ならびに国際交流基金をはじめ、モスクワ訪問に関った全ての方々に深甚なる感謝を申し上げたい。



モスクワ大学出版部の入口



歴史を感じさせる天井画



『ケルン国際報道展』1928年。これらのコレクションをもとに『エル・リッツキー 構成者のヴィジョン』が本学出版局より近日刊行

## 武蔵野美術大学 美術資料図書館

正門から煉瓦敷の通路をたどり、やや暗い印象のある事務棟一号館を抜け出ると、急に視界がひらけ、中央広場に出る。この広場の正面にあるのが、これから紹介する美術資料図書館である。荻原義信（元名誉教授）の設計によるこの建物は、中央が吹き抜けになっており、伸びやかな空間にパリ・ルーヴル美術館所蔵の作品から型抜きされた大型石膏像はとてよく似合う。

武蔵野美術大学は、帝国美術学校として一九二九年、吉祥寺に創立された。

一九六二年、大学として現在の小平市への移転にともない、図書館とともに美術館・博物館は必要不可欠であると考えられたものの、経済的に独立した施設をつくるのがかなわなかった。そこでこれらを一体の施設として運営することになり、両者の機能を併せもつユニークな機関として、美術資料図書館が一九六七年に誕生した。当初はこうした予算不足からではあったが、図書資料、美術・デザイン資料、民俗資料など、それぞれの属性や取り扱いの異なるさまざまな資料群を相互に関連づけ、資料の横断的な活用を目指す、新しい図書館・博物館のあり方を模索する試みもこの構想には含まれていた。

鉄筋三階建ての建物（後に増築）は、開架式・閉架式の書庫、閲覧室の図書資料部門と、四つの作品庫、彫刻陳列室、企画展のための二つの展示室などをもつ美術資料部門に分かれている。

図書資料部門では、美術・デザイン・建築・映像の主題分野を中心に国内外の展覧会図録を含めた二・三万冊の図書と、和・洋併せて約四千種の雑誌・逐次刊行物を所蔵し、全てインターネットによる公開検索で利用に供している。また本学の財産であり、顔ともいえるべき特別コレクションと貴重書のコレクションがある。特別コレクション「金原・服部文庫」は、本学創立に貢献した故金原省吾氏と故服部有恒氏の旧蔵書の寄贈によるもので、東洋美術関連資料約一万冊を誇る。

貴重書コレクションの一部としては、欧米の初期挿絵本から現代の絵本まで体

所在地 〒187-8505 東京都小平市小川町1-736  
 JR国分寺駅より  
 西武バス・武蔵野美術大学行で20分  
 西武国分寺線・鷹の台駅より徒歩15分  
 開館時間 9:00～20:00 (展覧会は通常17:00まで)  
 閉館日 日曜日、年末年始、資料整理休館日ほか  
 電話 042-342-6003 (美術資料担当)  
 042-342-6004 (図書資料担当)  
 U R L <http://www.musabi.ac.jp/library/>



「ポスターで見る日本映画 Part 2」展、  
 2004年7月。特別ゲストと本学教授による  
 ギャラリートークも見逃せない。

系的に集めた約五千冊の絵本、わが国の江戸期の写本奈良絵本を核とした約三百点の絵入り本、ウィリアム・モリスによるケルムスコット・プレス刊本、ロシア・アヴァンギャルドのエル・リシツキーの作品を中心とした約三百点の近代グラフィックデザイン資料など体系的に収集されている。これらのオリジナル資料は、教育研究の基本資料として位置づけられており、授業のときに学生が直接触って利用できるような機会も提供されている。本学の教育の特色である「本物に触れる」という考え方を十分に反映した資料群である。

美術資料のコレクションは、絵画・彫刻・版画、グラフィックデザイン、プロダクトデザイン、美術工芸品、民芸品、民俗資料の六つの柱がある。各分野の収集範囲を限定することによってコレクションの体系化を図りつつ、年間一〇回程度の展覧会を企画・開催し、一般にも公開している。

国内外の主要作品が揃う約三万点のポスターコレクション、一九世紀後半以降に量産された欧米・日本のいわゆる名作椅子を中心に収集した約三百点の近代椅子コレクションは、教育・研究のための基礎資料として学内で利用されるほか、学外の研究者からも注目されるまでに成長している。また、総数三二六六の陶磁コレクションは、著名な美術館に比べると実にはさやかなものだが、収集費といえるほどの予算もないなかで開館当初からの地道な収集活動により、三十数年を経て、ひとつのまとまった分野を形成するに至っている。特異なコレクションとして、柳瀬正夢作品、三林亮太郎作品資料、川崎コレクションがある。

この夏は、「デザインの国際化時代のパイオニア 川上元美・喜多俊之・梅田正徳の椅子デザイン」展(六月九日～七月一日)、つづいて「日本映画ポスター part 3 ポスター図像学」展(七月二五日～八月二七日)が予定されている。

本学にお越しのさいには、初夏の玉川上水道をのんびりと歩いて来られることをぜひともお勧めしたい。  
 (武蔵野美術大学出版局 平井公子)

# 大学出版部ニユース

▼法人化への改組議案可決さる

日本大学出版部協会二〇〇五年度通常総会が、四月二十八日、東海大学校友会館東海の間で開催された。出席した会員は二四校、委任状提出は四校。

渡邊勲幹事長（東京大学出版会）の開会挨拶に続き、三浦邦宏幹事（明星大学出版部）を議長に選出して議事を進行した。以下の議案が順次、提出された。

- ① 二〇〇四年度事業報告（案）
- ② 二〇〇四年度決算（案）及び監査報告
- ③ 二〇〇五年度事業計画（案）
- ④ 二〇〇五年度予算（案）
- ⑤ 二〇〇四年度役員改選

いずれも、全会一致で承認された。これによって、山口雅己幹事長（東京大学出版会）を中心とする新執行部体制が発足をみた。

続いて、第六号議案（任意団体）日本大学出版部協会を解散し、有限責任中間法人 大学出版部協会として設立する件の審議に移った。本議案は、昨年十二月八日の臨時総会における「……法人化の

道を、有限責任中間法人として具体的に検討し、その実現を目指す」との決議を受けて提出されたものである。

渡邊前幹事長より提案理由とともに、主として臨時総会時に示された定款案と今次の定款案との差違をめぐって議案説明がなされた。と同時に、七月一日の新法人成立のために必要な一連の手続きに関しても説明があった。

活発な質疑応答、審議ののち、定款案新法人設立に至る諸手続きを含めて議案の採決に入り、全会一致で可決承認された。最後に、渡邊前幹事長の四期にわたるリーダーシップに深甚の謝意を込め、全員の拍手で閉会した。

## ▼例会及び懇親会の開催

歴史的な第一歩を印した総会を受けて、同じく東海大学校友会館で、編集・営業・電子・国際の四部会、さらに懇親会が開かれた。懇親会には、二四校、七五名（協会顧問四名を含む）と来賓・オブザーバー五名、計八〇名が出席した。

新旧幹事長それぞれの感慨無量の挨拶ののち、石井顧問の乾杯の発声で開宴と

なった。恒例の新幹事、新人会員の紹介等が続いて、大学出版部連絡会議の弘前大学、真下正夫教授の活動報告があり、新たな旅立ちへの自ずからなる高まりに、ほどよく酔いがはじけた春の宴は、関野顧問の中締めで閉幕となった。



山口雅己新幹事長

渡邊勲前幹事長



## 北海道大学図書刊行会

- ▼本田 宏著『脱原子力の運動と政治』（A5判・六三〇〇円）日本の原子力政策の変遷を、政府・電力会社など支配的アクターと野党・市民運動といった対抗的アクターの動向、それらに影響を及ぼした原発事故などから詳細に跡付ける。
- ▼三上敦史著『近代日本の夜間中学』（A5判・八六一〇円）明治期から敗戦直後まで存在した夜間中学は、全国で二〇〇校を超えた。膨大な一次資料に基づきその歴史を明らかにし、近代日本の一般家庭からみた教育制度の実像を描く。
- ▼ジャコビー著、森果外訳『雇用官僚制「増補改訂版」』（A5判・六三〇〇円）『Employing Bureaucracy』を、「良い仕事」を労働者に提供するシステムとして把握し、労使関係や社会福祉運動を含む広い背景からアメリカ労務管理の成立史を描き出す。一九五〇年から現在までの史的展開を増補。
- ▼荒又明子著『燃料電池の電極触媒』（A5判・四九三二五円）地球環境と化石エネルギー枯渇の難問を解決する重要技術が燃料電池である。基本原理から電極触媒の機能と活性化、最新の光電気化学についても言及する。

## 東北大学出版会

- ▼ジェンダー法・政策研究叢書（辻村みよ子監修）第1巻『世界のポジティブ・アクションと男女共同参画』（A5判、三五四頁、二三一〇円（税込））本書は、21世紀COEプログラム「男女共同参画社会の法と政策」の成果として刊行される叢書（全一二巻）の第一巻である。このCOE拠点（男女共同参画社会形成のための理論的課題の解明を旨指しており、本書は国連・EU・欧米諸国やAA諸国など世界のポジティブ・アクション（積極的改善措置）の検討を通して、日本の政策にとって有効な示唆を与えている。
- ▼高橋英博著『グローバル経済と東北の工業社会―場所の個性・場所への意図・場所の思想―』（A5判、二四八頁、四〇〇〇円（税込））地方中小都市の戦後史問題と今後の行く末を、副題の三つの「場所」概念から説き起こす。経済のグローバル化が進む東北地方の六つの工業都市を扱った詳細な事例研究である。都市や地域に関わる地理学や経済学、社会学を専攻する研究者や学生、また地域振興の現場で活躍する行政や企業関係者に勧める一冊。

## 流通経済大学出版会

- ▼根橋正一・井上寛著『漂泊と自立―障害者旅行の社会学』（A5判・二八三二五円）近代社会が始まり、それがすべての人びとにとって運命となる以前、日本社会にはかすかに障害者が生きる漂泊社会があった。その人生はやはり苛酷で、そこに立ち戻らうと提案することはできないが、たしかにそこには定住者とも関係を持って生きていく可能性は存在した。新たに形成された社会は、障害者ばかりでなく健常者にとってもまた、労働を基準としてすべてがはかられる窮屈な世界だったのではなかったか。そして現代の労働・教育・福祉の社会のなかで弱者のレッテルを貼られた人びとの自立の困難さは増大したのではなかったか。
- 労働・真面目の原理に覆い尽くされた近・現代社会を批判し、遊びや文化をとおして人類の歴史を考察するホイジンガの視点には、旅行や観光が障害者の自立に重要な役割を果たす可能性もある。
- 本書は、第一部「弱者としての障害者の形成」、第二部「障害者旅行の展開と研究」第三部では「障害者旅行に関する実践的研究」の三部構成となっている。

## 聖学院大学出版会

▼Hideo Ohki et al., *A Theology of Japan: Origins and Task in the Age of Globalization* (B5変形、定価1,140円)モノグラフシリーズ・A Theology of Japanの第一巻。

日本の文化と異なるキリスト教の受容は、キリスト教の歴史を振り返れば、日本のキリスト教を生み出すか、日本の伝統に根ざしたキリスト教を模索することを意味した。このモノグラフ・シリーズで論じることは、そのどちらの立場でもなく「グローバルゼーションのコンテクストにおいて日本をトータルかつラディカルに批判的に捉え直すという問題意識」に基づいたキリスト教神学の構想を企てるものである。モノグラフ・シリーズを出版することを通して、英語圏の研究者と議論を展開しながら、新たな神学を構築しようとする。つまり「日本の神学の〈の〉というgenitiveは主格的(subjective)ではなく目的格的(objective)であり、日本を批判的に対象化する」ことを目指すのである。

三月に東京で開催された国際宗教学宗教史会議第十九回大会での報告を収録。

## 聖徳大学出版会

「心と身体の癒しシリーズ」の、第二巻 森 彪著「医における癒し」—人間関係形成のなから—(四六判・二八〇頁・二一〇〇円)がこの度刊行されます。

医療事故や医療過誤のニュースが問題として取り上げられることが多く癒しの善行や成功例はあまりクローズアップされない現代である、と考える著者である。医療は、まず身体の治療が必要であるがしかし安心した人間の交わりの中の医療が機能しなければならぬ。

「現代の医療は、あまりにもデータ依存すぎるのではないか、医療の本質は、人間関係がベースになれば真の医療とはいえない。」

こうした著者の考えをベースとして「命の原点をみつめて」「からだの原動力」「自我の混迷」「もう一人ぼっちの人間ではない」といった章立てで、構成されている。元埼玉県立小児医療センター病院長としての、経験に、裏打ちされた著者の医師としての実践と哲学がこめられた内容となっている。刊行予定より遅れ、お待たせ致しました。

## 麗澤大学出版会

▼堀内一郎著『日本の経営の源流を尋ねて—経営思想の歴史的研究』(A5判・二九四〇円)米国型経営方法が主流となつて久しいが、今やその限界と功罪が指摘され始めている。豊富な実務経験を踏まえ、江戸時代を中心に先人たちの経営思想を検証。日本の特長を明らかにし、その真髓と現代的意義を説く。日本の経営思想を再評価する書。

▼堀内一史著『分裂するアメリカ社会—その宗教と国民的統合をめぐる』(四六判・二五二五円) 宗教という視点から、国民的統合を阻む移民・民族、公教育、大統領政治などの諸問題を考察し、取り組むべき諸課題を提示する話題の書

▼A・エツィオーニ著／小林正弥監訳『ネクスト—善き社会への道』(四六判・二五二〇円)



『日本の経営の源流を尋ねて』定価2940円

## 慶應義塾大学出版会

- ▼21世紀COEプログラムの拠点のひとつ「多文化世界における市民意識の動態」が発する研究成果第一弾、全15巻。  
叢書 21COE/CICC 多文化世界における市民意識の動態 ①日本における有権者意識の動態（小林良彰編）、②地方自治体をめぐる市民意識の動態（小林良彰編）、③日本における新しい市民意識（中谷美穂著）、④現代日本の政策形成と住民意識（佐々木寿美著）、⑤現代日本の投票行動（谷口尚子著）、⑥現代日本の社会意識（渡辺秀樹編）、⑦戦後日本の社会と市民意識（有末賢・関根政美編）、⑧ポスト・ウォー・シティズンシップの構想力（萩原能久編）、⑨戦前日本の政治と市民意識（寺崎修・玉井清編）、⑩戦前日本人の対ドイツ意識（岩村正史著）、⑪多文化世界における市民意識の比較研究（山本信人編）、⑫韓国における市民意識の動態（小此木政夫編）、⑬EUと市民（田中俊郎・庄司克宏編）、⑭ニュースの国際流通と市民意識（伊藤陽一編）、⑮東アジアのメディア・コンテンツ流通（菅谷実編）。（各巻二二五〇／三六七五円、合計五三〇二五円）

## 産業能率大学出版部

- ▼内田増幸著『心ときめく料理・ワイン・レストラン』（一八九〇円）  
ともすると敬遠しがちなフランス料理とワインとレストランについて、著者が、つくり手としてではなく食べ手として、国内だけでなく外国にも実際に足を運んで得た貴重な体験が満載されています。贅沢の代名詞のようなフランス料理ですが、時にはそのような贅沢を経験することとは、人生にゆとりと感性をもたらすのではないのでしょうか。そしてそこからサードビスの本質、つまり人への思いやりを学びとることもできるような気がします。ワインと料理のマリアージュ（相性）、多くのレストランのサービスマン・特徴、著者が実際に食したレストランの豊富なメニューコレクション、さらにソムリエの第一人者である田崎真也氏の含蓄ある名言等は、フランス料理、ワイン愛好家に驚きと感動を与えるでしょう。  
▼姉妹書・内田増幸著『教養としての料理・ワイン・レストラン』（一八九〇円）  
フランス料理の基礎的な知識を興味深く綴った書。これであなかもフランス料理通になれる。

## 専修大学出版局

- ▼常行敏夫／岡山陽子他編『The Global Economy in the News2』（一五二〇円）  
本書は経済時事英語に重点を置き、そのための報道トピックスを厳選して所収している。前半は日本の景気動向や経済政策、経済成長率、失業率などの変化を日銀の金融政策の記事とからめて配置、後半は国際経済記事で、FTAや対外投資、米国の貿易収支、IMFの景気予測、ASEANや中国経済の動向などの記事をあつめた。それぞれに背景説明（解説）をつけ、リスニングを重視する意味から耳から英語を学ぶためCD付きとした。  
▼松浪健四郎著『折々の人類学』（一六八〇円）  
著者は「スポーツ人類学」を専攻するが、どんな事象にも人類学が基本に宿るとする立場から、日々思いつくまま綴った知識の集成である。各国を旅してきた経験からくるグローバルな視点、政治家として日本の社会をみてきた経験や教育者としての批評がぎっしり詰まっている。風土、アフガン、身体、人間、mono、教育・心理、アカデミズム、国家など。

## 大正大学出版会

▼藤原聖子著『「聖」概念と近代——批判的比較宗教学に向けて』（A5判 四〇〇頁 六三〇〇円） 抽象名詞としての「聖」は今では日常的な日本語としても用いられるが、一九世紀後半の西洋において徐々に使用が拡大した、比較的新しい概念である。本書は、E・デュルケムとR・オットーのテキスト読解に基づき、「聖」概念が近代的宗教学研究に導入されたことは、宗教に対してどのような新たなペースペクティヴがとられるようになったことを意味するかを解明する。

後半ではオウム真理教地下鉄サリン事件後の知識人の言論を整理・分析することを通して、「客観的」と表現されてきた近代的宗教学研究のスタンスを、「批判的」という概念で再定義することを提唱し、かつ「比較」という方法がいかに効果的に批判的思考をもたらさうるかを例を示しつつ論じる。

▼廣澤隆之著『唯識三十頌』を読む』（TU選書 一九九五円） 唯識思想の基本文献『唯識三十頌』の三十の詩頌からなる短く簡潔な教理の深遠なる心の世界を読み解く。

## 玉川大学出版部

▼『地域社会に貢献する大学』（OEC D編/相原総一郎、出相泰裕、山田礼子訳・三一五〇円） 地域社会への貢献は、大学の役割である教育と研究に並ぶ社会的責務と捉えられるまでになってきた。地域のニーズに大学はどう応えるのかを提言。

▼『学士学位プログラム』（日本高等教育学会編・三四六五円） 国際的に適用できる学士学位のブランドデザインをどのように描けばいいのか。各国の学士課程の歴史と現在、学位の事例から考える。

▼『授業のデザイン』（山口榮一著・一九九五円） 教師が学習者と積極的にかかわり、教育活動を意図的、計画的に働きかけるプログラムとしてデザインする方法と技術を、具体例を上げ詳述する。

▼『シカゴ大学教授法ハンドブック』（A・プリントクリー他/小原芳明監訳・二二〇〇円） 授業の運営に役立つ具体的なアイデアを提供。大学教員にとって必携の実用の書である。

▼『新生と性の教育学』（三井善止編著・二二一〇円） 「生と性」の教育の目標を、人格の完成や豊かな人間形成という観点の下で捉え、そのあり方を多角的に検証。

## 中央大学出版部

▼茅野信行著『アメリカの穀物輸出と穀物メジャーの発展』（二一九〇円） 穀物輸出政策と穀物メジャーの戦略・機能・類型を具体的事例に即して分析、世界穀物市場の力学を明らかにする。

▼松本或彦著『現実政治学』（一八九〇円） 堅苦しい政治学ではなく、実際に起きたエピソードをもとに政治をわかりやすく解説。面白く読めて、政治の仕組みがよく理解できる。

▼小島武司編『ADRの実際と理論Ⅱ』（五四六〇円） 民事訴訟法学者、現職の裁判官、法社会学者が、個別的検討という多角的視点からADRに取り組んだ論集第二巻。

▼『日本論』プロジェクト編『日本論——国際化する日本』（二九四〇円） 「国際化する日本」をテーマに、政治・経済・文化の多様な側面から九人の論者が日本論の本質に迫る。

▼園田茂人編著『東アジアの階層比較』（二二五〇円） 職業評価、社会移動、中産階級を切り口に、欧米発の階層研究を現地化しようとした労作。比較の視点から東アジアの階層実態に迫る。

## 東京大学出版会

『ゴリラ』山極寿一著

四六判／二六四頁／税込二六二五円

ジョージ・シヤラー、ダイアン・フォッシー、そして伊谷純一郎など、錚々たる動物学者たちがかつてアフリカでゴリラの研究に取り組み、その生態、行動、社会などについて優れた記録を残しました。それらはまた、はるかアフリカの熱帯雨林やそこに暮らす動物たちの息吹に思いを馳せながら読むことができる秀逸な動物記でもありました。

その流れをしっかりと引き継いでゴリラと対峙してきたのが山極寿一先生です。一九七〇年代にゴリラの調査を開始した山極先生は、人類進化の謎を解くために重要な手がかりとなるようなゴリラの生きざまをつぎつぎと明らかにしてきました。この本には、およそ三〇年にわたるフィールドワークの記録とゴリラへの熱い想いがぎっしりと詰まっています。

「人類を超えた動物」といわれるゴリラとは、どんな動物なのでしょう。内戦が続くアフリカでフィールドワークを続けるタフなナチュラリストが描き上げた「情熱の動物記」をお届けします。

## 東京電機大学出版局

日本の高等教育において、制度的にも技術的にも実施可能となったeラーニング。しかし企業内教育にくらべていまだ積極的な導入が進まないのは、国内の状況に則した検証と教材開発手法の確立がなされていないことが要因であると考えられる。実例をもとに分析し、実務に役立つ具体的な解を提示する二冊の書籍を紹介する。

▼『大学eラーニングの経営戦略―成功の条件』(吉田文・田口真奈・中原淳編著／二八三五円) eラーニングで生き残るために! eラーニング導入に成功した日本の大学の事例を取り上げ、「技術・コスト・教育効果」の観点から分析。大学の経営戦略としてeラーニングを導入し、成功するための条件を解き明かす。

▼『実践インストラクショナルデザイン―事例で学ぶ教育設計』(清水康敬監修／内田実著／二二一〇円) eラーニングを中心とした新しい教材開発の事例をもとに、教育設計の理論や手順を詳解。各工程の意味を解説し、表やリストを多数掲載してあるため、開発者の実務への応用にも役立つ。

## 東京農業大学出版会

▼『桜をめぐる生きものたち』竹内将俊、田村正人、飯嶋一浩著

日本人に最も身近な存在の木が桜。その桜をとりまく生き物たちの実態と生態。

平成一七年二月／B五判

一八七頁／税込価格二一〇〇円

▼『宮川環境読本―真の循環型社会を求めて』太田猛彦編著

宮川という名の川が全国にいくつも存在する。人々より深い関わりのある川が宮川である。宮川の生態を知り人々との共生を考える。真の循環型社会に向けて絶好のテキスト。

平成一七年二月／B五判

二二三頁／税込価格一九九五円

▼『考える大根―大根読本』東京農大・NPO法人良い食材を伝える会編

食卓に欠かせない代表的食材・ダイコンの魅力を多方面から紹介。ダイコンの歴史と伝統、料理、豆知識にふれて改めて考えさせられる。

平成十七年三月／四六判

一四四頁／税込価格二六八〇円

## 法政大学出版局

《叢書・ウニベルシタス》品切れ書目の重版プロジェクト《精選復興》は、第七回目（本年五月）の復刊を致しました。書目は以下の6点です。

- ▼『神・死・時間』（E・レヴィナス／合田正人訳／四二〇〇円）
  - ▼『カント政治哲学の講義』（H・アーレント著／R・ベイナール編／浜田義文監訳／三六七五円）
  - ▼『社会学とは何か——関係構造・ネットワーク形成・権力』（N・エリアス／徳安彰訳／二九四〇円）
  - ▼『ショーペンハウアー——哲学の荒れ狂った時代の一つの伝記』（R・ザフランスキー／山本尤訳／六三〇〇円）
  - ▼『イギリスの大学——その歴史と生態』（V・H・H・グリーン／安原義仁・成定薫訳／五五六五円）
  - ▼『自然宗教に関する対話 ヒューム宗教論集Ⅱ』（D・ヒューム／福鎌忠恕・斎藤繁雄訳／二六二五円）
- 第八回以降のリクエストも継続して募集致しております。詳しくは小局ウェブサイトを<http://www.h-up.com>をご覧ください。

## 武蔵野美術大学出版局

▼『複合的表現——絵画からの展開』（武蔵野美術大学研究室編・三八八五円・A4判・四色刷・一一六頁）平面から立体映像、インスタレーションへ。その歴史的展開から、ジャンルを横断し、枠を超越する現代美術の表現を読み解く！

▼『アートが知りたい——本音のミュージエロジ』（岡部あおみ編著・一九九五円・A5判・二二四頁）美術作品を展示する空間は美術館やギャラリーにとどまらない。荒木経惟、会田誠らアーティストやキュレーター等への、現代アートの状況を生き生きと伝えるインタヴュー集。

▼『電脳の教室——コンピュータリテラシー』（佐藤淳一著・一九九五円・A5判・一六〇頁）パソコン&ネットワークの全体像を捉えることに主眼を置いた格好の指南書。多彩な比喻表現となごみ系イラストで解説。今や必須のコンピュータを使いこなす能力UPを目指す。



## 明星大学出版部

教職に関する科目の関連書から

▼佐々井利夫・高島秀樹他『総合演習——教師の資質・能力の向上を目指して——』

A5判・一六〇ページ 一五七五円  
昨今指摘される小・中・高生の学力低下の問題が、「総合的な学習の時間」のあり方との関連で取り沙汰されている。教職科目「総合演習」の、そもそもの設置の背景、趣旨、目標、方法などを論述する。

▼青木秀雄『洞察力を培う初等社会科教育法——情報社会を生き抜くために——』

A5判・二二六ページ 一八九〇円  
戦後の小学校「社会」科教育の変遷をたどり、その可能性を探る。

▼森下恭光・佐々井利夫『増補 道徳教育の研究——改訂』

A5判・一八五ページ 一八九〇円  
▼阪井恵・小山真紀『ハートフルメッセージ——初等音楽科教育法 第2版』

B5版・二六四ページ 一八九〇円  
▼高島秀樹『教育調査 改訂2版——教育の科学的認識をめざして』

A5版・二二八ページ 一九九五円  
▼森下恭光編『教師論——教職とその背景』

A5判・二一八ページ 一六八〇円

## 早稲田大学出版部

▼『アジアの少子高齢化と社会・経済発展』（店田廣文編 三九九〇円）アジア各国は、急速に進展する高齢化と少子化の問題にどう対応するのかが、日本を中心に都市化と経済発展の現状を比較分析して、今後の動向を探る。

▼『国際主義の系譜——大島正徳と日本の近代』（後藤乾一、五四六〇円）数多くの国際会議に参加し、教育を通しての国際協調を希求した大島正徳。この忘れられた国際人の生涯を詳細に跡づけ、日本の近代を考察する。

▼『ヨーロッパ人の見た文久使節団——イギリス・ドイツ・ロシア』（鈴木健夫／P・スノードン／G・ツォーベル著、三二五〇円）幕末の日本人はヨーロッパでどう迎えられたか。その反響を鮮やかに再現する。写真・図版多数収録。



## 東海大学出版会

▼東京大学海洋研究所『海洋生命のダイナミクスシリーズ 全5巻』（A5判、四五〇頁、各三七八〇円）

本シリーズは、東京大学海洋研究所が全国の研究者を糾合して海洋生命科学研究の第一線をまとめたものである。

海に起源した生命はどのように進化してきたか？（西田陸編 第1巻『海洋の生命史—生命は海でどう進化したか』、多様な海洋環境に生命はどのように適応しているか？（竹井祥郎編 第2巻『海洋生物の機能—生命は海にどう適応しているのか』、海洋生態系の構造と相互関係はどのようになっているか？（木暮一啓編 第3巻『海洋生物の連鎖—生命は海でどう連環しているか』、海洋生命系の変動は人類に何をもちたらずか？（渡邊良朗編 第4巻『海の生物資源—生命は海でどう変動しているか』、新しい海の生命観）があるとするればそれはどのようなものか？（塚本勝巳編 第5巻『海と生命—海の生命観』を求めて）、こうした課題への最新の挑戦をわかりやすく解説する現代海洋生命科学の集大成。

## 名古屋大学出版会

▼水田洋／松原慶子訳『アダム・スミス 修辞学・文学講義』（四四一〇円）言語・文体論によるコミュニケーション理論。

▼齋藤希史著『漢文脈の近代—清末—明治の文学圏』（五七七五円）東アジアにおける「文学」の変容を捉える。

▼若尾祐司／羽賀祥二編『記録と記憶の比較文化史—史誌・記念碑・郷土』（五九八五円）歴史の場はいかにして形成され、何をもちたらずたのか。

▼梶田孝道／丹野清人／樋口直人著『顔の見えない定住化—日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』（四四一〇円）デカセギの全体像を初めて解明。

▼今津孝次郎／馬越徹／早川操編『新しい教育の原理—変動する時代の人間・社会・文化』（二九四〇円）ゆれ動く時代の教育を考える。

▼安田信之著『開発法学—アジア・ポスト開発国家の法システム』（五〇四〇円）転機を迎えたアジア諸国の法制度の現状と開発協力のあり方を解説。

▼木村真人／波多野隆介編『土壌圏と地球温暖化』（五二五〇円）陸域生態系最大の炭素貯蔵庫をどう管理するか。

## 三重大学出版会

■長谷川直哉著『スズキを創った男、鈴木道雄』A5判二九〇頁(本体二二〇〇円+税)

- 1章 遠州における企業家精神の醸成／  
2章 繊維産業の発展／3章 自動織機製造事業への進出／4章 繊維機械工業の発展／5章 幻の自動車開発計画／6章 戦後復興と労働争議／7章 オートバイ製造事業への進出／8章 自動車製造事業への進出。自動織機製造業者から自動車製造業者への転進の軌道を探る。
- 第三回日本修士論文賞、募集締め切り。
- 対象者 未発表の著作。(日本語)
- 刊行 刊行は本会が行います。
- 件数 若干点
- 賞金 大賞20万円、論文賞10万円
- 締切り 2005年 3月15日必着
- 応募者は三二人で、東京からの応募者が多数を占める、年度を追って内容が充実し、今年は「目覚ましい」論文が集まるなど、望ましい結果に終わりました。

## 京都大学学術出版会

▼『海と湖の化学——微量元素で探る』藤永太郎監修、宗林・一色編(五六〇頁・四二〇〇円) 微量無機元素の分析法の開発とその水圏における動態解析を通して、世界に誇る海洋化学を開拓した京都大学の水圏化学。その歴史と最新の理論／方法のすべてを一冊に結実。

▼『いのちの森——生物親和都市の理論と実践』森本・夏原編著(三九八頁・二九四〇円) これまでの都市緑地計画には、本来生息していた野生生物への配慮が不足し、かえって身近な環境を劣化させ生物多様性の危機を招いていた。都市緑地をユニークな生態系と捉え、自然との共生を創造する「真のビオトープ」造りの方法を示す。日本生命財団環境研究助成。

▼『田中秀央 近代西洋学の黎明——「憶い出の記」を中心に』菅原・飯塚・西山編(三七四頁・四五・一五円) 我が国初の日羅辞典を編纂した田中秀央。その自伝と膨大な書簡類には、明治・昭和の知のうねりが克明に刻まれている。市河三貴・土居光知、その師ケーベルやローレンス、そして穂積陳重、高津春繁……西洋学の礎を創った人々の暈気を活写する史料集。

## 大阪経済法科大学出版部

▼揚勲・留家瑞著／杉野明夫監訳『中国農村改革の道——人民公社解体と請負制』(四八判二四一・五五円税込)

困難な農村改革に著者自ら携わりつつ、現地調査や研究の成果をまとめた。人民公社の管理上の欠陥を指摘するとともに、農民個々の責任と自覚に力点をおいた請負制に変貌する中国の未来像をみることもできる。

▼杉野明夫著『中国社会主義の再生』(A5判二六二・五五円税込)

一九七九年に市場型経済改革・対外開放政策へと路線転換させ、躍進しつつける中国経済。それはまさしく「中国社会主義の再生」といふべきものと著者は主張する。毛沢東主義による自力更正戦略からその後の開放政策までを概観し、中国の未来を見据える。

▼能塚正義・梁官洙監修／大阪経済法科大学・復旦大学共編『東アジア経済の発展と展望』(A5判二七三・〇〇円税込)

一九九八年に大阪経済法科大学と世界の各大学で共同開催された国際学術シンポジウムで発表されたレポートを再編集し、単行本として刊行。



## 大阪大学出版会

▼田中美穂著『多国籍企業の法的規制と責任』A5判・上製・二〇〇頁 定価四九三〇円 国際社会における公正な責任負担の観点から、子会社の経営行為に対する親会社の責任と法的規制のあり方を各国の法制度や判例の詳細な分析を通して多角的に解明する。

▼湯浅邦弘・竹田健二編著『懷徳堂の歴史を読む』B5判・並製・六〇頁 定価一〇五〇円 懷徳堂の主要人物や主要資料を解説し、アーカイブという観点から懷徳堂の歴史とその魅力を記す。

▼浜田茂幸・米田俊之編『先端歯科医学の創生』B5判・並製・二七六頁 定価四二〇〇円 二一世紀COEプログラム「フロンティアバイオデンティストリー」に取り組む大阪大学歯学研究科の最先端の研究成果をわかりやすく解説。

▼岸本忠三著 大阪大学新世紀セミナー『いのちの不思議』A5判・並製・九六頁 定価一〇五〇円 免疫学の世界的権威であり、総合科学技術会議のメンバーとして政府の重要施策決定にも関わる著者が不思議に満ちた生命の誕生から死までを、最先端の医療と倫理から論述する。

## 関西大学出版部

▼伴義孝著『「気づき」の構造―実践と思想の対話―』(A5判・三六七五円) 身心一如の気づきと学びの構造を「からだ」と「生」の原点から解明。時代は競争原理から共生原理への転換を要求。近代科学主義過剰依存状況からの脱却を展望し東洋思想と西洋思想の融合を基盤とする21世紀の生活課題を問う。

▼井上泰山著『中国近世戯曲小説論集』(A5判・四二〇〇円) 宋元明三代に文字化された戯曲や小説などの所謂「白話文学」を対象としてその成立過程を解明。中国の専門家との論争、スペインにおける新資料の発掘状況、中国国内の専門誌掲載論考など、著者の長年にわたる通俗文学研究の成果をまとめた論文集。

▼伊藤健市訳『アメリカン・ウェルフェア・キャピタリズム』(A5判・三六七五円) 19世紀末からニューディール期のアメリカを対象に、多くの企業に見られたウェルフェア・キャピタリズムの生成・発展・消滅史を、一次資料を駆使して克明に解き明かした高著の本邦初訳。アメリカにおける労務管理・労使関係の史的展開と実態把握にとって必読の書。

## 関西学院大学出版会

近刊

▼関西学院大学災害復興制度研究所編『被災地協働―第一回全国交流会から』(A5並製・二二〇頁・予価一四七〇円) 新刊

▼前島宗甫編著・関西学院大学「暴力とキリスト教」研究会

『暴力を考える―キリスト教の視点から』(A5並製・一七二頁・定価一七八五円)

▼澤谷敏行他著

『大学事務職員のための日中留学交流の手引き』実務担当者のための受け入れ・派遣の手引き書。(A5並製・一五四頁・定価一八九〇円)

▼川口順子・佐藤行雄・村田俊一他著

K・G・リぶれっと『国連の将来と日本の役割』青山学院・関西学院合同シンポジウム。(A5並製・八八頁・定価九四〇円)

▼関西学院大学COE編

『先端社会研究』創刊号

特集テーマ「幸福と不幸の社会学」。(A5並製・三六〇頁・定価二九四〇円)

▼園井英秀編『英文学と道徳』(四六判・四一〇頁・三七八〇円) 道徳的覚醒を促す英文学の伝統と諸問題。論述や視点のバラエティーは本書タイトルの主題のパラダイムである。

▼J・マリタン／荒木慎一郎訳『岐路に立つ教育』(A5判・一九四頁・二九四〇円) 教育哲学の古典的文献。教育の根本問題に関して多くの混乱や動揺が見られる教育界にとって、多くの示唆に富んでいる。〈長崎純心大学学術叢書7〉

▼児島洋著『哲学的人間学序説―モナドと汝』(A5判・三三〇頁・三九九〇円) 人格は私の内にはなく、我と我の間にある。五十年にわたる思索の結晶。

▼今田盛生編著『森林組織計画』(A5判・二七二頁・二九四〇円) 持続可能な森の計画手法を実践に基づき解説する。

▼細江守紀著『情報とインセンティブの経済学』(A5判・二四四頁・二九四〇円) 〈経済工学シリーズ・第2期〉

▼岩佐昌暉編著『中国現代文学と九州―異国・青春・戦争―』(新書判・二四八頁・一三六五円) 戦前、九州に関わり深い日中作家群像。〈KURARO叢書4〉

▼図書館新刊見計しシステム

二〇〇四年の出版全体の新刊刊行点数は七万四五千七点、前年対比二・七%増で一日平均二〇〇点強の新刊が書籍市場に回ったことになる。協会加盟一九出版部では二〇〇四年の年間新刊刊行点数は八三〇点で、前年の八一三点と2出版部の増加を考えれば、ほぼ前年並みの点数で推移しているといえる。しかし、新刊刊行点数が増加の傾向にある書籍市場全体の状況と、その中で学術書・専門書など小部数出版物の状況との関わりを考えると得ない。前年行った図書館新刊納本見計しシステム中止館の調査では、現品を扱う繁雑さなども中止理由に挙がっていた。当システムが活用されるべき出版状況であることはいま一度考える必要がある。

▼紀伊國屋書店札幌本店

日本大学出版部協会フェア/常設展示

今年四月、JR札幌駅前という好立地に開店した紀伊國屋書店札幌本店は、総面積一三〇〇坪に及ぶ北海道最大級の店舗で、学術書の品揃えにも力をいれています。オープン催事の二環として、日本大学出版部協会フェアが五月九日から一カ月半にわたって開催され好評でした。また、二階には新刊書を中心

とした当協会の常設展示棚も設置されています。ご来札の折にはぜひ一度足をお運びください。

\*

本年より会期が7月変わった東京国際ブックフェア(東京ビッグサイト)に、例年どおり協会ブースで出展し展示販売をいたします。ぜひご来場下さり協会ブースをお訪ね下さい。



紀伊國屋書店札幌本店・日本大学出版部協会フェア

## 関西学院大学図書館所蔵 特別文庫・貴重図書——関西の文庫3

関西学院大学図書館は現在一八種類の特別文庫と多くの貴重図書を所蔵している。これらのコレクションは図書館の蔵書の中でも学術的価値が高く、また教育・研究をサポートする図書・資料群としても重要なものである。特別文庫には、歴史に名を連ねる思想家の著作及び関連研究書を収集した著作文庫（アダム・スミス著作文庫など）と、特定の主題に関連する図書を収集した学術的価値が高い図書・資料群（丹羽記念文庫など）がある。また、貴重書庫に保存されている貴重図書には、稀少でかつ学術的価値が高い図書・資料が含まれている。以下これらのコレクションの中から代表的なものを紹介する。

### 「室井文庫」——キリシタン関係文献——〈特別文庫〉

幕末から明治初年のオリジナル版を含む和訳聖書、摂津・河内・泉州の宗門改帳・寺請帳や、大正から昭和戦前・戦後刊行のキリシタン関係、日本キリスト教史、南蛮文化関係の図書が揃っている。イギリスのミッションから一八四六年に琉球に派遣されたベッテルハイムが和訳した「使徒行伝」も含まれている。（全五七二冊）

### 「丹羽記念文庫」——近代短歌関係文献——〈特別文庫〉

明治・大正・昭和の短歌を中心に収集。正岡子規らの写真主義短歌や、与謝野晶子・鉄幹らの浪漫主義短歌が幅広く集められている。創刊号から揃った雑誌『明星』などが含まれており、また与謝野晶子第一歌集『みだれ髪』の初版本が加えられている。（全二二九点）

### 「兵庫県漁具図解」——一八九七年〈貴重図書〉

兵庫県下の漁具の種類と使用方法を詳細に調査・編集した資料で、地域ごとの魚名、漁期、構造、新調費、使用法などの解説と、漁船図、漁具構造図、使用図で構成されている。一八九七年に神戸で開催された第二回水産博覧会に出展するために作成。「資料提供・図書館運営課」

田中直哉（関西学院大学出版会）

## 関西支部だより

## 編集後記

もう一〇年以上も前になるが、日本電子出版協会の会合で、WWW (World Wide Web) の構想と仕組みに関する簡単なレクチャーを受けた。「インターネット」や「ホームページ」という言葉も、そこで初めて聞いたような気がする。

そのときは「ネットワークのネットワーク」という概念が何を意味し、何をもたらすのかわかりませんが、「パソコン通信」の一種ぐらいにしか考えていなかった。しかし、Mosaic (モザイク) によって表示された画面は、何がしかの可能性を予感させるものであった。読みやすさや美しさからは縁遠いパソコン通信の画面に比べ、そこで紹介されたページには「レイアウト」という人間による美的操作の痕跡を見る事ができたのである。

そして今や、インターネットなしでは仕事ができないし、プライベートでもよく利用している。現にこの「編集後記」もインターネットを利用してMosaicの綴りを確認し、eメールによって原稿を送っている。一〇年前には想像できなかったことを、私は毎日、慣れた行爲として行っている。紙がなくなる日も意外と近いのかも知れない。

小野朋昭（東海大学出版会）

# 日本大学出版部協会加盟出版部一覽

## 北海道大学図書刊行会

060-0809 札幌市北区北9条西8丁目 北海道大学構内  
TEL 011-747-2308 FAX 011-736-8605

## 東北大学出版会

980-8577 仙台市青葉区片平 2-1-1 東北大学構内  
TEL 022-214-2777 FAX 022-214-2778

## 流通経済大学出版会

301-8555 龍ヶ崎市平畑 120  
TEL 0297-64-0001 FAX 0297-64-0011

## 聖学院大学出版会

362-8585 上尾市戸崎 1-1  
TEL 048-725-9801 FAX 048-725-0324

## 聖徳大学出版会

271-8555 松戸市岩瀬 550  
TEL 047-365-1111 FAX 047-363-1401

## 麗澤大学出版会

277-8686 柏市光ヶ丘 2-1-1  
TEL 04-7173-3331 FAX 04-7173-3154

## 慶應義塾大学出版会

108-8346 港区三田 2-19-30  
TEL 03-3451-6926 FAX 03-3451-3124

## 産業能率大学出版部

103-0028 中央区八重洲1-3-19 辰沼建物ビル7階  
TEL 03-5205-2255 FAX 03-5205-2470

## 専修大学出版局

101-0051 千代田区神田神保町 3-8-3 専修大学4号館  
TEL 03-3263-4230 FAX 03-3263-4288

## 大正大学出版会

170-8470 豊島区西巢鴨 3-20-1  
TEL 03-5394-3026 FAX 03-5394-3038

## 玉川大学出版部

194-8610 町田市玉川学園 6-1-1  
TEL 042-739-8935 FAX 042-739-8940

## 中央大学出版部

192-0393 八王子市東中野 742-1  
TEL 0426-74-2351 FAX 0426-74-2354

## 東京大学出版会

113-8654 文京区本郷 7-3-1 東京大学構内  
TEL 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958

## 東京電機大学出版局

101-8457 千代田区神田錦町 2-2  
TEL 03-5280-3433 FAX 03-5280-3563

## 東京農業大学出版会

156-8502 世田谷区桜丘 1-1-1  
TEL 03-5477-2562 FAX 03-5477-2643

## 法政大学出版局

102-0073 千代田区九段北 3-2-7  
TEL 03-5214-5540 FAX 03-5214-5542

## 武蔵野美術大学出版局

180-8566 武蔵野市吉祥寺東町 3-3-7  
TEL 0422-23-0810 FAX 0422-22-8309

## 明星大学出版部

191-8506 日野市程久保 2-1-1  
TEL 042-591-9979 FAX 042-593-0192

## 早稲田大学出版部

169-0071 新宿区戸塚町 1-104-25  
TEL 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406

## 東海大学出版会

257-0003 秦野市南矢名 3-10-35 東海大学同窓会館内  
TEL 0463-79-3921 FAX 0463-69-5087

## 名古屋大学出版会

464-0814 名古屋市中千種区不老町 1 名古屋大学構内  
TEL 052-781-5027 FAX 052-781-0697

## 三重大学出版会

514-8507 津市上浜町 1515 三重大学出版ホール内  
TEL 059-232-1356 FAX 059-232-1356

## 京都大学学術出版会

606-8305 京都市左京区吉田河原町 15-9 京大会館内  
TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190

## 大阪経済法科大学出版部

581-8511 八尾市楽音寺 6-10  
TEL 0729-41-8211 FAX 0729-41-9979

## 大阪大学出版会

565-0871 吹田市山田丘 1-1 大阪大学事務局内  
TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1614

## 関西大学出版部

564-8680 吹田市山手町 3-3-35  
TEL 06-6368-1121 FAX 06-6389-5162

## 関西学院大学出版会

662-0891 西宮市上ヶ原1番町 1-155  
TEL 0798-53-5233 (内線3475) FAX 0798-53-9592

## 九州大学出版会

812-0053 福岡市東区箱崎 7-1-146 九州大学構内  
TEL 092-641-0515 FAX 092-641-0172